

## 『源氏物語』 宿木巻の語りの方

深田 弥生

宿木の巻は、源氏物語における光源氏死後の物語・宇治十帖の第五巻目であるが、宇治が主な舞台であった橋姫・椎本・総角・早蕨の四巻とは場所を変え、都を舞台として次のように語り始められる。

・そのころ、藤壺と聞ゆるは、故左のおほい殿の女御になむおはしける。(宿木 五 33・5)<sup>1</sup>

「そのころ」という冒頭表現については、吉海直人氏の言うように、宿木巻は唐突に「前巻とは別の空間の人物」<sup>2</sup>である今上帝の女御について語り始め、突如物語の「時」を宇治から都へ移す。そのような語り出しを持った宿木巻だが、それまで舞台を宇治としていた前四巻とは語りの方も異なっているようである。

宿木の巻に関して、これまで草子地(=語り手の詞)の異常なまでの多さがしばしば指摘されてきた。久保重氏は、「宿木巻の草子地について」<sup>3</sup>において、宿木巻の草子地の異常な多さについて、この巻が「後続する物語の始発」であることなどを考え合わせ、「作者は、読者に、薫がいかにか特殊な人物であるかを熱意をこめてわからせ、納得を求めようとしている」と述べる。また、薫の矛盾を指摘する草子地に、帚木巻冒頭・夕顔巻末の草子地との類似性を指摘する。竹村浩子氏は「源氏物語宿木巻試論——草子地の役割をめぐって——」<sup>4</sup>において、「宿木巻における語り手のあり方は、作品世界から相当に距離を置いたものであった」と述べ、他の巻と比べて独特であることを「都の論理」という言葉で説明を試みる。早蕨巻においては中君の不安が一旦解消されていることを、中の君が東屋巻になると中君は自らの宿世を肯定的に受け入れていくようになることを、浮舟という存在によって物語が次の主題に移ろうとしていることに説明を求める。助川幸逸郎氏は、「宿木巻の草子地の意義——『源氏物語』第三部の論理とかかわらせて——」<sup>5</sup>で、薫の矛盾を指摘する草子地は他の巻に類を見ないものと主張、宿木巻が「物語の転換点」である点から説明を試みる。

しかしながら、どの論考でも宿木巻の草子地の多さを薫の人間性や宿木巻の質などに求めてしまっており、宿木巻の語りが一体どのようなものかという観点からの考察が欠けたままになっている。また、いずれも宿木巻の語り手が一人であることを前提に論を進められているらしい。しかし、巻前半部の藤

壺・女二宮物語が「噂話として伝え聞くことも可能な内容で、意外にも、宇治の中の君付きの女房たちが宿木巻を語っている傾向が濃厚」<sup>6</sup>だとする三谷邦明氏の論が示唆しているように、宿木巻を分析していくと、その語りの質が「つぎはぎ」とも言うべき、様々な情報源から出来事を集めて編集した語りだと考えることが出来るのである。以下、宿木巻の語りの方、どのような情報源から得られたものであるか、また、本来の語り手はどのような立場にいるのか、という観点からその語りの方を明らかにしていきたい。

宿木巻は、先程も述べたように主な舞台が宇治から都へと変わっているが、宇治を舞台とする物語も僅かながら展開されている。この巻で語られている主な舞台として、(1)三条の宮(薫邸)・(2)二条院(匂宮・中君邸)・(3)宮中・(4)六条院・(5)宇治八宮邸が挙げられるが、それぞれの場での語りの方の様子を分析すると、大変興味深い特徴がそれぞれに見出せる。その語りの方の詳しさや、登場人物に対する距離に関して、濃淡とも言うべきものが見られ、その「濃淡」によって語り手がどの人物に近い立場にいるかが浮かび上がってくる。結論から言うと、この巻を編集しまとめた語り手は薫に近い立場の語り手であり、その語り手が二条院・六条院・宮中それぞれの物語を収集し統括しており、宇治では先の四巻と同様、人物をあまり批判することのない淡々とした語りの方と、薫の視点を借りた語りの方を行っていると考えられるのである。「濃淡」という点では、都を舞台にするものにおいては(2)二条院→(3)宮中→(4)六条院の順で、記述が徐々に希薄になっていく。また一方で、視点人物として薫・中君を利用し、時にこの二人の視点や心情に寄り添いながら、登場人物の心の内をも深く語ることに成功しているのである<sup>7</sup>。以下、薫方にいると思われる(1)の語り手が、(2)・(3)・(4)の語り方を取り入れながら語り方を行う方法を、順に見ていきたい。なお、(5)の宇治側の語り方に関しては、薫の目を借りた語り方と、前の四巻と同様な語り方を持ち合わせた語り方だと考えられる。

この巻を統括する語り手が薫方にいることは、薫に無敬語で待遇し、あたかも薫が語り手であるような錯覚に陥ってしまうような文章が多く見られること、ま

た薫の内情に詳しい語り場面内にしばしば顔を出すことから窺うことが出来る。次の二例は、中君への想いに煩悶する薫の心内に迫る語りが見られる。この巻本来の語り手は、薫に対して近しい立場にしながら薫には常に批判的であり、冷めた目で彼を見つめている。

・「…例の、をこがましの心や」と、おもへど、「情なからむ事は、猶、いと、本意なかるべし。又、たちまちの、わが心の乱れに任せて、あながちなる心をつかひてのち、心安くしも、えあらざらん物から、わりなく、しのびありかむ程も、心づくしに、女の、かたがた思し乱れん事よ」など、さかしく思ふに、せかれず、今の間も、恋しきぞ、<sup>7</sup>わりなかりける。さらに、見では、えあるまじく思え給ふも、<sup>1</sup>返々あやになる、心なりや。むかしよりは、すこし細やぎて、あてに、らうたかりつるけはひは、「たち離れたり」とも思えず、身に添ひたる心地して、さらに、ことごとく思えずなりにたり。宇治に、いと、渡らまほしげに思ひ給ふめるを、「さもや、渡し聞えてまし」など、思へど、「まさに、宮は許し給ひてんや。さりとて、忍びて、はた、いと、便なからむ。いかさまにしてかは、人目、見苦しからで、思ふ心の行くべき」など、心もあくがれて、ながめ臥し給へり。

(宿木 五 76・1)

・「あまり言少なゝるかな」と、さうざうしくて、をかしかりつる、御けはひのみ、恋しう思ひ出でらる。<sup>ウ</sup>少し、世の中をも知り給へるけにや、「さばかり、浅ましようわりなし」とは、思ひ給へりつる物から、ひたぶるに、いぶせくなどはあらで、いと、勞々じく、恥づかしげなる気色も添ひて、さすがに、なつかしう言ひこしらへなどして、出だし給へる程の御心ばへなどを、思ひ出づるも、ねたう、かなしうも、さまざま心にかゝりて、わびしくおぼゆ。なに事も、いにしへには、いと多く、まさりて、おもひ出でらる。「なにかは。この宮、かれ果て給ひなば、我を頼もし人にし給ふべきにこそはあめれ。…」など、たゞ、この事のみ、つと思ゆるぞ、<sup>フ</sup>怪しからぬ心なるや。<sup>オ</sup>さばかり心深げに、賢しがり給へど、男と言ふ物の、心憂かりける事よ。亡き人の御悲しさは、言ふかひなき方にて、いと、かう苦しきまではなかりけり。これは、萬にぞ、思ひめぐらされ給ひける。

(宿木 五 77・2)

傍線部は草子地であるが、中にはそれが薫による言説なのか、語り手によるものなのか決め難いものもある。

傍線部エ・オに関しては明らかに薫を相対化する語り手の発言だが、ア・イは薫が自らの矛盾する心をこのように批判的に見ているとも見なせそうなものであるし、ウは薫の長い心中思惟の中に語り手が割り込んできた発言のようにも思える。これらは、薫に対して敬語無しの語り、この場面の主体が薫であるのか語り手であるのか判断しかねるほどに薫に近い距離で物語が語られていることを示すものだろうと思う。これらのように、薫に密着しつつも批判的な眼差しの持ち主が、この巻を通してずっと語りを行っているのである。

しかしながら、先程も述べたように、この巻は中君方・宮中・六条院・宇治をも舞台とし、語り手が薫方だけであるとは考えられない。宿木巻は、それぞれの舞台に近い立場の語り手がそれぞれにあり、薫方の語り手がそれらをまとめている形式の物語であると考えられるのである。

次に、(2)二条院の語り手について見ていきたい。宿木巻には無敬語表現が数多く見られるが、それは薫に限ったことではない。匂宮に対しても若干例が見出せるし、特に中君への心内に迫る無敬語表現は、この巻の語り手が中君にごく近い立場の者であったことを示唆するものとして注目すべきである。中君が主人公性と視点人物の役割とを備えていることに関しては、既に竹村氏が指摘する通りであることは先に述べた。二条院の語り手は、この巻全体を統括する語り手とごく近い距離にいると考えられ、(あえて物語の情報入手ルートを実体的に想定するとすれば)薫方の語り手と二条院側の語り手とは、強固な情報ネットワークを持っていたと考えられるだろう。例えば、薫と中君の対話の場面においては、語り手は薫と中君の内面の両方に迫っており、二人に近い立場にいる語り手がそれぞれ存在することを示唆していると考えられる。

・「(薫会話文)」

と、のたまふに、猶、いと恥づかしく、言ひ出でん言の葉もなき心地すれど、

「(中君会話文)」

と、いと、つゝましげにのみ、のたまふが、いたく、しぞきて、たえだえ、ほのかに聞ゆれば、心もとなくて、

「(薫会話文)」

と、のたまへば、「げに」と思して、すこし身じろき寄り給ふけはひを、聞き給ふにも、ふと胸うちつぶれど、さりげなく、いとゞ、鎮めたる様して、「宮の御心ばへ、思はずに浅うおはしけり」

とおぼしく、かつは、言ひも疎め、又、なぐさめも、かたがたに、しづしづと、聞え給ひつゝおはす。女君は、人の御恨めしさなどは、うち出で語らひ給ふべき事にもあらねば、たゞ、「世やは憂き」などやうに、思はせて、言少なに紛らはしつゝ、「山里に、あからさまに、渡し給へ」と思しく、いと、ねんごろに思ひて、聞え給ふ。

〔(薫会話文)〕

などは言ひながら、折々には、過ぎにし方の悔しさを、忘るゝ折なく、「物にもがなや」と、とり返さまほしき様など、ほのめかしつゝ、やうやう暗くなりゆくまで、おはするに、いと、うるさく思えて、

〔(中君会話文)〕

とて、入り給ひぬる気色なるが、いと、口惜しければ、

〔(薫会話文)〕

と、心とりに、聞え給へば、しばし入りさして、

〔(中君会話文)〕

と、のたまふ声の、「いみじう、らうたげなるかな」と、常よりも、昔思ひ出でらるゝに、えつゝみあへで、寄り給へる柱のもとの、簾垂の下より、やをらおよびて、御袖をひかえつ。女、「さりや。あな心憂」と思ふに、何事かは言はれん。物も言はで、いとゞ、引き入り給へば、それにつきて、いと馴れ顔に、なからは内に入りて、そひ臥し給へり。

〔(薫会話文)〕

と、うらみ給へば、いらへすべき心地もせず、思はずに、憎く思ひなりぬるを、せめて思ひしづめて、

〔(中君会話文)〕

と、あはめて、泣きぬべき気色なる、少しは、ことわりなれば、いとほしけれど、

〔(薫会話文)〕

とて、いと、のどやかに、もてなし給へれど、月ごろ、「くやし」と、思ひ渡る心のうちの、苦しきまでなりゆくさまを、つくづく、言ひ続け給ひて、許すべき気色にもあらぬに、「せむ方なく、いみじ」とも、世の常なり。

(宿木 五 71・14)

波線部は中君・薫いずれかの心情を表している箇所である。対話の場面では、しばしば視点を主人公側に固定して、主人公の心情を追って語られていることが多いが、ここでは薫だけでなく中君の心情も同じように語られる。このように、視点を一箇所固定せず、二

人の会話文とともに視点が行き来し、薫・中君と交互に視点人物を入れ替えており、竹村氏の指摘するように中君は視点人物でもあると考えられるのである。

しかしながら、中君がたとえ語り手に接近される立場にあっても、結局この巻をまとめている本来の語り手は薫方であり、宿木巻はどんな語りでも最終的には薫方に収斂されていってしまう構造になっているのである。以下、本来の語り手が薫方であるとする証、そして中君方の語りの内容の濃さを順に挙げていく。

まずは、薫が中君方に衣装を贈る場面において、一見すると不審な語り口が姿を見せる。この場面において、薫は母・女三宮方へ参ってから衣を二条院にいる中君に贈る。衣は中君付の女房・大輔の君に渡され、女房たちが各々で衣装を縫う場面が描かれた後、突然このような長い語りが入る。

・誰かは、何事をも、後見かしづき聞ゆる人のあらむ。宮は、おろかならぬ御心ざしの程にて、よろづを、「いかで」と、思し掟てたれど、細かなる内々の事までは、いかがは思しよらむ。限りもなく、人にのみかしづかれて、ならばせ給へば、世の中の、うちあはず寂しき事、いかなる物とも知り給はぬ、ことわりなり。「艶に、そゞろ寒く、花の露をもてあそびて、世は過ぐすべき物」と、おもほしたる程よりは、おもほす人のためなれば、おのづから、折節につけつゝ、まめやかなる事までも、扱ひ知らせ給ふこそ、ありがたく珍らかなる事なめれ。「いでや」など、誇らはしげに聞ゆる、御乳母などもありけり。童べなどの、なり、あざやかならぬ、折々うちまじりなどしたるを、女君は、いと、恥づかしう、「中々なる住ひにもあるかな」など、人知れずは、思す事なきにしもあらぬに、まして、この頃は、世に響きたる、御ありさまの花やかさに、かつは、宮の内の人の、見思ふらむ事も、「人げなき事」と、おぼし乱るゝ事も添ひて、嘆かしきを、中納言の君、いとよく、推し量り聞え給へば、「疎からんあたりには、見苦しう、くだくだしかりぬべき、心しらひの様も、あなづるとはなけれど、何かは、ことごとしげに、したて顔ならむ。中々、思えなく、見咎むる人やあらむ」と、おぼすなりけり。今ぞ、又、例の、目安きさまなる物どもせさせ給ひて、御小桂織らせ、綾の料、賜はせなどし給ひける。この君しもぞ、宮にも劣り聞え給はず、さま殊にかしづき立てられて、かたはなるまで心驕りもし、世を思ひすまして、あてなる心ざまはこよなけれど、

故宮の御山住みを見そめ給ひしよりぞ、「寂しき所のあはれさは、様殊なりけり」と、心苦しう思われて、なべての世をも思ひめぐらし、深き情をも、習ひ給ひにける。「いと、をしの、人習はしや」とぞ。(宿木 五 83・16)

そして、この長い記述を終えると、語りは再び物語の中に戻っていき、薫の忍び難い様子とそれに苦慮する中君の姿が語られる。

この長い語りは、全体が草子地すなわち語り手の詞と見なすことができるものであるが、この中で言及されているのは次のようなことである。

- ① 匂宮は、中君への情愛の深さゆえに後見をするが、細かなことには気付かない。
- ② 匂宮が生活の世話をすることを非難がましく言う中君の乳母がいる。
- ③ 童女がみずばらしい格好をしていることが中君には恥づかしく、六条院と比べて余計に嘆かわしい。
- ④ 薫は、中君の気持ちをよく推察し、大袈裟にはしないで衣を贈った。
- ⑤ 薫も匂宮と同様かしくされて育ち、尊大で世を悟りきっていたが、八宮を知ってからは情をも知った。
- ⑥ 「愛でるべき八の宮の感化であるよ」ということだ。<sup>8</sup>

これらの内容は、薫・匂宮のいずれの内容をも含んでいるが、この直前の記述が二条院による語りである点、この記述が匂宮方についての内情に詳しく、薫の行為を非常に有り難がっている点、中君への困った恋慕が描かれていない点から、「とぞ」の中身は(2)の中君方に近い語り手によるものであると考えられる。しかしながら、この「とぞ」という言葉に着目したい。この「とぞ」という言葉は、場面の一部を受けて、物語が聞き書きである体を示している言葉であると考えられる。ここにおける「とぞ」は、この引用部分全体を受けるものと考えたい。されば、「いと、をしの人習はしや」と述べているのは(2)二条院・中君方の語り手であり、それを受けて「とぞ」、しかしかということと、と述べてこの記述をまとめているのはこの巻本来の語り手、つまり薫方の語り手であると考えられるだろう。

もう一つ、この巻における二条院方の語りが薫方に収斂されていく例を挙げたい。中君が無事男君を出産した一連の記事だが、最終的には薫の心に迫る語り口で場面を終えている。長文であるが、一部省略して引用する。

・からうじて、その暁に、男にて生まれ給へるを、宮も、いと、かひあるさまにて、嬉しく思したり。<sup>7</sup>太将も、よろこびに添へて、うれしく思す。よべ、おはしましたりし畏まりに、やがて、この御喜びもうちそへて、立ちながら参り給へり。かく、こもりおはしませば、参り給はぬ人なし。(中略、産養の様子を三日、五日、七日、九日と語られ、帝から刀を贈られた記事の後、夕霧からも祝いがあったという記述がある。)よろしからず思すあたりなれど、宮の思さむところあれば、御子の君達など、まるり給ひて、すべて、いと、思ふ事なげにめでたければ、御身づからも、月頃、物おもはしく、心地の悩ましきにつけても、心細う思し渡りつるに、かく、面だゝしう、今めかしき事どもの多かれば、少しは、慰みもやし給ふらん。<sup>1</sup>大将殿は、「かくのみ、大人び果て給ふれば、いとど、わが方さまは、け遠くやならむ。又、宮の御心ざしも、えおろかならじ」と思ふは、口惜しけれど、又、はじめよりの心掟てを思ふには、いと、嬉しうもあり。(宿木 五 109・5)

この場面は、当初は二条院側より語られているのが分かる。というのは、(中略したが)二条院にいなければ捉えられないはずの産養の様子が詳細に書かれており、また薫の思いが波線部Aのように表面的にしか書かれていないからである。しかし、話題が帝のこと、夕霧のことへと移っていくにつれ、いつの間にか語りの主体は薫側に移ってしまっているようだ。帝の刀下賜の記事、夕霧よりの御祝いの記事に続いて、中君の心情へと話題が二条院側に戻るが、それにも拘らず中君の心の内は傍線部のように、草子地の形で「少しは慰みもやし給ふらん」と推量されるのみなのである。そしてその直後の波線部イにおいて、中君の幸せを喜びつつも複雑な薫の思いを、詳細に敬語無しで語る記述でこの場面が閉じられる。波線部イで語られる薫の心情は、Aにおいて表面的にしか捉えられていなかった薫の喜びとは違っている。両者のいずれも「うれし」という言葉を含みながらも、Aは二条院側から捉えられた表面的な薫の思い、イは薫方より彼に密着したゆえに語る事の出来る薫の心の奥深くであるゆえ、このように重複しつつも異なった内容が語られていると考えられるのではないだろうか。

ただし、(2)二条院側の語り手は、(3)宮中・(4)六条院の語り手と比べて顔を出す回数も多く、薫方の語りに対して発言をすることもあるようである。次の用例は、匂宮留守中に中君方を訪れた薫が、若君を見る場面であるが、語り手が次のように長々と顔を出す。な

お、この場面全体は当初は中君方の語り手によるものと考えられるが、ここでは引用しない。

・ゆゝしきまで、白くうつくしうて、高やかに物語し、うち笑み給へる顔を見るに、わが物にて見まほしう、うらやましきも、7世の、思ひ離れ難くなりぬるにやあらむ。されど、「言ふかひなくなり給ひにし人の、世の常の有様にて、かやうならむ人をも、とどめ置き給へらましかば」とのみ、おぼえて、此のごろ、面だゝしげなる御あたりに、「いつしか」などは、思ひ寄られぬこそ、1あまりすべなき、君の御心なめれ。ウかく、女々しうねぢけて、まねびなすこそ、いとほしけれ。「しか、悪び、かたほならむ人を、みかどの、とりわきて、せちに近づけて、むつび給ふべきにもあらずかし。誠しき方さまの、御心掟てなどこそは、目安く物し給ひけめ」とぞ、推し量るべき。

(宿木 五 114・5)

傍線部イ・ウの相反する長文の草子地に関して、竹村氏は「薫像の修正」を語り手が強制していると解し、助川氏は「薫の矛盾を際立たせ」るはたらきがあると解釈する。しかしながら、両氏ともこれらが別個の語り手によるものだという視座が欠けており、再検討の必要があると思われる。

乳母によって簾外へ差し出された若君は、薫の目を通して描写され、語りは徐々に薫の心内の描写へと、無敬語という方法で移行していく。そして、女二宮でなく大君の子が欲しかったと思う薫の心を傍線部イのように批判する。ここまでは、薫に近いがやたらと物事を批判的に捉える薫方の語り手の言説と一致する口調であるからして、薫方の語り手が語りを支配していると言えるだろう。その直後の傍線部ウは、明らかにイの発言をした語り手とは違う人物である。恐らくこれは、場面の始めで語りを支配していた、二条院方の語り手によるものだろう。先程挙げた用例のように、二条院方の語り手は薫を冷めた目で見ず、中君の心をよく推し量って世話をする立派な人物であると捉えている。それゆえ、薫をイのようにこき下ろす語り手に対して、薫の公的な面での素晴らしさを推察し同情しているのである。このように、薫方の語り手・中君方の語り手はしばしば同じ場に登場し、せめぎ合いながら語りを行っている。先に挙げた薫と中君の対話の用例からも、薫方・中君方それぞれの語り手がこの巻を支配する力が強く、両者が交互に語りを担っていることが分かる。

次に、(3)宮中にある語り手について考察したい。宮

中においての語りで特徴的なのは、薫の行為・心情を表面的にしか捉えきれず草子地によって心の奥深くを付度するばかりであり、奥深くを捉えるには本来の語り手(薫方)にその叙述を委ねるしかない点、また儀式における語りでは、その語りがあくまで伝聞であることが露呈してしまっている点、この二点が挙げられる。順に用例を挙げて見ていきたい。

先に挙げたように、巻の冒頭で宮中に舞台を移した語りは、間もなくその舞台へ薫を登場させる。帝の心の中で女二宮の婿に決まった薫は、帝のお召しを受けて碁の勝負をする。

・いつも、かやうに、け近くならし給ふに、ならひたれば、「さにこそは」と、思ふに、  
「よき賭物はありぬべけれど、軽々しくは、え渡すまじきを、何をかは」  
など、のたまはする御気色、いかゞ見ゆらむ。いと心遣ひして、さぶらひ給ふ。

(宿木 五 37・2)

・〈薫和歌〉と、奏し給へる、用意浅からず見ゆ。

(宿木 五 37・13)

宮中においては、このように、薫の様子を外から捉えるのみで、薫の心情に対する理解も表面的なものにとどまっている。そして、この直後の記述において、この巻本来の語り手に語りを預けて初めて、薫の内心が読者に届くことになる。

・かやうに、をりをり、ほのめかさせ給ふ御気色を、人づてならず、うけ給はりながら、例の、心の癖なれば、いそがしくしも、おぼえず。「いでや、本意にもあらず。さまざまに、いとほしき人々の御事どもをも、よく聞き過ぐしつゝ、年経ぬるを、今更に、聖の、世にかへり出でん心地すべき事」と、思ふも、かつは怪しや。「殊更に、心を尽くす人だにこそあなれ」とは、思ひながら、「后腹におはせばしも」と、思ゆる心のうちぞ、あまりおほけなかりける。

(宿木 五 37・15)

先程挙げた二例で宮中に固定されていた視点は、ここで帝と薫の描写を止め、語り手を薫方に戻す。薫方の語り手が、薫の心の奥深くを語っているのである。このように、この巻の語りは様々に場所を移動しつつも、最終的には薫方に近い語り手に統括されている。

宮中における語り手の薫への理解が浅い証拠として、次のような用例が見られる。やや長文になってしまいが、帝に近い距離にいながら薫に対しては遠いことが露呈している場面であるため全て引用する。

・御念誦堂のあはひに、廊を、つゞけて造らせ給ふ。西おもてに、うつろひ給ふべきなめり。東の対どもなども、焼けて後、うるはしく新しく、あらまほしきを、いよいよ磨きそへつゝ、こまかにしつらはせ給ふ。かゝる御心づかひを、内裏にも聞し召して、程なくうち解け、うつろひ給はむを、「いかゞ」と思したり。<sup>7</sup>帝と聞ゆれど、心の闇は、おなじ事になむおはしましける。はゞ宮の御もとに、御使ありける、御文にも、たゞ、この御事をのみなむ、聞えさせ給へりける。故朱雀院の、取りわきて、このあま宮の御事をば、聞えおかせ給ひしかば、かく、世を背き給へれど、おとろへず、何事も、もとのまゝに、奏せさせ給ふ事などは、かならず聞し召しけれ、御用意深かりけり。かく、やんごとなき御心どもに、かたみに、限りもなく、もてかしづき騒がれ給ふ面だゝしきも、<sup>1</sup>いかなるにかあらむ、心の中には、殊に嬉しくも思えず、猶、ともすれば、うちながめつゝ、宇治の寺、つくる事をぞ、急がせ給ひける。

(宿木 五 112・3)

傍線部「いかなるにかあらむ」に注目してほしい。語り手は、帝が女三宮を丁重に扱っていることなど、帝側の内情には詳しい。しかし、帝や母宮に大事にされているにも拘らず「嬉しくも思え」ない薫の心の奥を、このように訝しがることしか出来ないほど薫との距離が隔たっているのである。これは次に引用する、薫が女二宮の美しさを認めながらも宇治に寺を建てることにばかり心を入れている様子が描写される際の語りとは対照的である。次の用例は、女二宮を三条邸に迎え入れた場面であり、薫が寺を立てることに力を入れている記述が先の用例と重複しているが、明らかに宮中の語りとは違っている。

・かくて、心安く、うち解けて、みたてまつり給ふに、いと、をかしげにおはす。さゝやかに、しめやかにて、「こゝは」と見ゆる所なくおはすれば、「宿世のほど、口惜しからざりけり」と、心おごりせらるゝ物から、過ぎにしかたの忘ればこそはあらめ、猶、まぎるゝ折なく、物のみ恋しく思ゆれば、「此の世にては、慰めかねつべきわざなめり。仏になりてこそは、怪しくつらかりける、契りの程を、『何の報い』と明らかに、思ひも離れなめ」と、思ひつゝ、寺の急ぎにのみ、心を入れ給へりける。 (宿木 五 119・5)

先ほどの例と比較すれば、文末の記述「宇治の寺、つくる事をぞ、急がせ給ひける」と「寺の急ぎにのみ、心を入れ給へりける」とは完全に対応している。しか

し、前者が薫の大君への想いを捉えきれずに「いかなるにかあらむ」と訝しがるにとどまっているのに対して、三条邸における後者の例は「過ぎにしかた」すなわち大君が未だに恋しくて忘れられないことを波線部のように詳細に語っているのである。<sup>9</sup>

次に、宮中で行われた儀式に関して語りの方が特徴的であることが挙げられる。この巻には、宮中で行われた儀式として挙げられるのは①女二宮の装着、②薫・女二宮の初夜（これは、儀式というには語弊がある気もするが一応掲げておく）、③薫・女二宮の三日夜の宴、④藤の花の宴の四つであるが、その語られ方は前者三つと後者とでは大きく異なっている。すなわち、前者三つは詳細な描写をせずにごくあっさりと言っているのに対し、後者④は大変に詳細な描写をしつつ、その場面が他者よりの情報であることをはっきりと示している。①②③が薫方の語り手によるものと解釈することも出来るような簡潔な内容であるのに対して、④は宮中にいた者以外には語れない、大変詳細な内容なのである。以下、それぞれの場面の記述の用例を確認する。

① さるは、女二の宮の御装着、たゞ、此の頃になりて、世の中、ひゞき、営みのゝしる。よろづの事、みかどの、御心一つなるやうに思し召し急げば、御後見なきしもぞ、中々めでたげに見えける。女御の、しおき給へる事どもは、さる物にて、作物所、さるべき受領どもなむ、とりどりに仕うまつる事ども、いと限りなし。

(宿木 五 107・14)

② かくて、その月の廿日あまりの程にぞ、藤壺の宮の御装着の事ありて、又の日なむ、大将、まゐり給ひける。その夜の事は、忍びたるさまなり。

(宿木 五 110・11)

③ 三日の夜は、大蔵卿より始めて、かの御方の、心よせになさせ給へる人々、家司に、仰言賜ひて、しのびやかなれど、かの御前・隨身・車副・舎人などまで、禄賜はず。その程の事どもは、わたくし事のやうにぞありける。

(宿木 五 111・10)

以上のように、①②③に関しては破線部で示したようなごくあっさりした記述でしかない。次に挙げる④は、宮中（ここでは藤壺）に確かに坐していた語り手の目によって視覚的に語られるが、いつの間にかその語り手は他者からの見聞であったことが明らかにされている。そして、この場面の語り手が結局は薫方の語り手によってまとめられていることが、場面の最後までにははっきりと分かってしまうのである。

④ 明日とての日、藤壺に、うへ渡らせ給ひて、藤の花の宴せさせ給ふ。南の廂の御簾あげて、御椅子、立てたり。<sup>ア</sup>おほやけわざにて、あるじの宮の、仕うまつり給ふにはあらず。上達部・殿上人の饗など、内蔵寮より仕うまつれり。(中略、親王・公卿の列席者などが挙げられる。管弦が始まる。) つぎつぎに、琴・箏の御琴・琵琶・和琴など。<sup>イ</sup>朱雀院の物どもなりけり。笛は、かの、夢に伝えし古のかたみのを、「又なき、物の音なり」と、めでさせ給ひければ、<sup>ウ</sup>「この折の清らより、又は、いつかは、はええしきついであらむ」と、思して、取うで給へるなめり。(中略、以下、管弦の描写に続いて肴と酒が供される。食器類の描写あり。) 御さかづき参り給ふに、おとゞ、<sup>エ</sup>頻りては便なかるべし、宮達の御中に、はた、さるべきもおはせねば、大将に、ゆづり聞え給ふを、はゞかり申し給へど、<sup>オ</sup>御気色もいかゞありけむ、御さかづき捧げて、

「をし」

と、のたまへる、声づかひ、もてなしさへ、<sup>カ</sup>例の、おほやけ事なれど、人に似ず見ゆるも、今日は、いとゞ、見なしさへ添ふにやあらむ。…たぐひなく、めでたき思えなり。…くだりたる座に帰りつき給ふ程、<sup>キ</sup>こゝろ苦しきまでなむ見えける。按察の大納言は、…参りて、心のうちにぞ、腹立ち給ひける。<sup>ク</sup>紙燭さして、歌どもたてまつる文台のもとに寄りつゝ、置く程の気色は、おのおの、したり顔なれど、「例の、いかに、怪しげに古めいたりけん」と、思ひやれば、あながちに、皆も、たづねも書かず。上の町も、上臈とて、御口つきどもは、殊なる事見えざめれども、しるしばかりとて、一つ二つぞ、問ひ聞きたりし。これは、大将の君の、おりて、御かざし折りて、まゐり給へりける<sup>ケ</sup>とか。

すべらぎのかざしに折ると藤の花及ばぬ枝に袖かけてけり

<sup>コ</sup>うけぱりたるぞ、にくきや。

よろづ世をかけて匂はむ花なれば今日をもわかぬ色とこそ見れ

又、誰にか、

君がため折れる挿頭はむらさきの雲に劣らぬ花のけしきか

世の常の色とも見えず雲居まで立ちのぼりたる藤なみの花

<sup>サ</sup>「これや、この、腹だつ大納言のなりけむ」とこそ見ゆれ。かたへは、僻事にもやありけん。

<sup>シ</sup>かやうに、殊なるをかしき節も無くのみぞあなりし。

(宿木 五 115・5)

傍線部の草子地に注目していくと、ア～キまでの語り手と、ク～シの語り手とは明らかに違っているのが分かる。それぞれの草子地に関して説明を加えておくと、

ア…この藤の花の宴が朝廷の催しであることを補足説明する。

イ…前述の楽器が朱雀院所有のものであったことを補足説明する。

ウ…薫が笛を取った理由を推量して述べる。

エ…夕霧が盃を薫に譲った理由を推量して述べる。

オ…帝の思し召しを訝しがる(推量)。

カ…薫の様子をめめたいと賞賛する。

キ…薫が下座に戻ったことに対し感想を述べる。

ク…宴で詠まれた歌を強いては聞き出さず、ほんの少しだけ聞いておいたと断り書きをする(省略)。

ケ…薫の歌に関して、人から聞いた情報であることを表す(伝達)。

コ…薫の歌を憎らしいと批判する。

サ…前述の歌について推量する。

シ…前述の歌を特に面白みが無いと批判する。

ア～キまでは、語り手は宴の内情に詳しく、また宴を実際に見ている口ぶりを示している。なお、ウやオに関しては、薫方の語り手が既に顔を出していると見なすこともできそうだが、いずれにせよ傍線部キまでは宮中にいる語り手が優勢だったはずである。それに対して、按察大納言の内心を述べてから、ク以降で和歌の記述に入った途端、語り手は歌を他者から聞いたことを突然暴露し始め、また薫方の語り手に特有な意地悪さを傍線部コで見せ、挙げ句の果てにこれらの歌を「殊なるをかしき節も無」いものであると批判している。宮中における場面でも、最終的には物事を批判的に見る本来の語り手、すなわち薫方の語り手によって統括されてしまうことが示されているのである。それに対して①～③の場合、儀式の内容が聞き書きであることは示されないが、その代わりに④で見られたような詳細な記述がなされることがないのである。

なお、破線部「かの、夢に伝えし古のかたみ」によれば、宮中にいる語り手は薫の父親が柏木であることを知っているらしいことが分かる。この点にも興味深い問題が隠れていそうだが、ここではそれを指摘するだけにとどめる。

そして、都における語り手のうち最も語りの内容が

薄いのが(4)六条院の語り手である。六条院の事柄について語られる箇所も少なく、

- ① 薫を婿にする帝の意向を知った夕霧が、匂宮を婿にすることを決意する場面  
(宿木 五 38・6～39・1)
- ② 夕霧が匂宮と六の君との婚姻を八月に決めて匂宮に伝える場面  
(同40・14～16)
- ③ 六の君との初夜に匂宮が訪れず気を揉む夕霧が匂宮に消息を贈る場面  
(同54・8～15)
- ④ 夕霧から催促を受け出向いた匂宮が六条院で初夜を過ごす場面  
(同57・15～58・6)
- ⑤ 匂宮・六の君の露頭宴  
(同64・14～65・16)
- ⑥ 昼に六の君の姿を見て、中君をも思う匂宮  
(同68・4～69・2)
- ⑦ 薫の任右大将饗応の宴  
(同108・14～109・4)
- ⑧ 内親王降嫁に対する夕霧の感懐と落葉の宮  
(同111・4～9)

以上八箇所のみである。また、その描写内容の少なさもさることながら、(3)宮中における語りと同様に、実際に目にしないと描写出来ないほどの詳細な内容に関しては、必ずそれが聞き書きであることを示しているのが特徴的である。以下、①～⑧のうち特に六条院方の語りの質を示している用例を取り上げ、用例を挙げていく。

六条院における語りの特徴は、その記述がごく僅かである点、六条院内を詳細に描写する際には匂宮の視点を借りる方法をとるか、最終的に宿木巻本来の語り手が姿を表し、その記述内容が他者からの聞き書きであることを示すか、いずれかの方法を取って語りが行われる点、の二点が挙げられるかと思う。

まず、六条院に関する記述は量的にも質的にも少ない。六条院を舞台とする場面の少なさがそれをよく示しているが、ここでは先程挙げた⑦の場面を引用し、六条院方の物語の内容の希薄さを示すこととする。

- ⑦ 「左のおほい殿の、したまひけるまゝに」とて、六条院にてなむ、ありける。垣下の親王たち・上達部、大饗に劣らず、あまり騒がしきまでなむ、つどひ給ひける。この宮も、渡り給ひて、静心なければ、まだ、事果てぬに、急ぎ帰り給へるを、おほい殿の御方には、  
「いと、飽かず、めざましう」と、のたまふ。劣るべうもあらぬ、御程なるを、たゞ今の思えの花やかさに思し驕りて、おし立ちもてなし給へるなめりかし。  
(宿木 五 108・14)

この饗応の宴の場面に関して挙げられているのは、列席者に関すること、またその一人である匂宮が六の君を訪れずにさっさと帰ってしまったこと、そしてそれを六の君が面白からず思ったことである。儀式内容の描写の希薄さも特徴的だが、語り手は、中君の身分が六の君に劣るわけでないこと述べ、傍線部のように、権門・夕霧を父に持つゆえ思い上がっている六の君を批判しているのである。

では、六の君をこのように批判的に捉えている語り手は誰であろうか。中君に味方しているような語り口であるからして二条院方であるとも考えられなくもないが、やはり、これはこの巻本来の語り手、すなわち薫方の語り手であると考えられるだろう。既に述べたように、薫方の語り手は物事を冷めた目で捉え、登場人物に対して何かと批判的な目を向けている。この場面においても、そのような語り手が顔を出して、六条院方の語りを統括してこの場面を終えていると考えてよいだろう。

次に、六条院方を詳細に描写する場合には、匂宮の視点を借りるか、あるいは場面の最後にそれが伝聞であることを示すか、いずれかの方法を取って語りが行われているという点に関して用例を示す。

六条院内を詳しく描写する方法として、匂宮の視点を借りるという方法を取っている箇所がある。ここでは、⑥の場面を用例に挙げる。

- ⑥ 宮は、女君の御有様、昼、見きこえ給ふに、いとゞ、御心ざしまさりにけり。おほきさ、よき程なる人の、様体いと清げにて、髪のがりば、頭つきなどぞ、物より殊に、「あな、めでた」と、見え給ひける。色あひ、あまりなるまで匂ひて、物々しくけ高き顔の、まみ、いと恥づかしげに、らうらうじう、すべて、何事も足らひて、「かたちよき人」と言はむに、飽かぬ所なし。<sup>7</sup>廿に一つ二つぞ、あまり給へりける。いはけなき程ならねば、かたなりに飽かぬ所なく、あざやかに、「さかりの花」と見え給へり。限なくもてかしづき給へるに、かたほならず、げに、親にては、心も惑はしつべかりけり。たゞ、やはらかに愛敬づき、らうたき事は、かの対の御かたは、まづ、思し出でられける。物のたまふいらへなども、恥ぢらひ給へれど、又、あまりおぼつかなくはあらず、すべて、いと見所多く、かどかどしげなり。よき若どもも三十人ばかり、童六人、かたほなるなく、装束なども、例の、うるはしき事は、目馴れて思さるべかめれば、引きたがへ、心得ぬまで、好み過し給へる。三条殿腹の大君を、春宮に参らせ給

へるよりも、この御事をば、いと、殊に思ひ掟て聞え給へるも、宮の、御思え・有様からなめり。

(宿木 五 68・4)

これを、次に掲げる場面④と比べてほしい。④においては、逢う前に想像していた六の君の様子を匂宮が推量する次のような記述があり、六条院にいる際の匂宮の視点は場面に生かされていない。

④「人の御程、さゝやかに、あえかなどにはあらで、よき程になりあひたる心地し給へるを、いかならむ。物々しくあざやきて、心ばへも、たをやかなる方はなく、物誇りかになどやあらむ。さあらむこそ、うたてあるべけれ」など、思せど、さやうなる御けはひにはあらぬにや、御心ざしの、おろかなるべうも、思されざりけり。

(宿木 五 58・2)

④における草子地「さやうなる御けはひにはあらぬにや」とは、六の君の実際の様子を「匂宮が想像していた通りの高慢な様子ではないのか」と推し量って述べる詞である。ここでは、語り手は匂宮の視点を借りていないが、そのために匂宮と六の君に関して、このようなあっさりとした短い描写に終わっているであろう。それに対し、⑥は破線部「見きこえ給ふに」以下、「かどかどしげなり」まで匂宮の目を通しており、語り手と匂宮の言説を区別するのも困難であるほど語り手と匂宮とは一体化している。そして、六条院内の様子と夕霧が匂宮をかしく様子に言及してから、傍線部ウのように語り手のほうへと表現主体が戻っていく。この⑥の用例のように、描写内容の希薄である六条院内について詳細な描写を行うには、匂宮の視点を借りて語り手と一体化させるという方法が一つある。

では次に、六条院の描写を詳細に行うもう一つの方法として、六条院方の語り手に視点を預けつつも、最後にその内容が何らかの形で聞き伝えられたものであることを記す手法がある。⑤の露頭の宴では、この方法によって語りが行われており、その方法は(3)宮中で挙げた④の用例と共通するものがある。

⑤宵すこし過ぐる程に、おはしましたり。寝殿の南の廂、東によりて、御座まるれり。御台八つ、例の御皿ども、いと、今めかしうせさせ給ひて、餅まるらせ給へり。珍しからぬ事書きおくこそ、憎けれ。おとゞ、わたり給ひて、  
「夜、いたう更けぬるを」  
と、女房して、そゝのかし聞え給へど、いと、あざれて、とみにも、いで給はず。北の方の御兄弟の左衛門督、藤宰相などばかり、物し給ふ。からうじて、いで給へる御様、いと、見るかひある心

地す。主の頭中将、御さかづき捧げて、御台まるる。次々の御かはらけ、二度三度まゐり給ふ。源中納言の、いたう、すゝめたてまつるに、宮、少しほゝ笑み給へり。<sup>1</sup>「煩はしきあたりを」と、ふさはしからず思ひて、言ひしを、思し出づるなめり。されど、見知らぬやうにて、いとまめなり。東の対に出で給ひて、御供の人々、もてはやし給ふ。おぼえある殿上人ども、いと、あまたあり。四位六人は、女の装束に、細長そへて、五位十人は、三重がさねの唐ぎぬ、裳の腰も、みな、けぢめあるべし。六位四人は、綾の細長・袴など。かつは、かぎりある事を、あかず思しければ、物の色・しぎまなどをぞ、清らをつくし給へりける。召次・舎人などの中には、乱りがはしきまで、いかめしうなんありける。<sup>2</sup>げに、かく、賑はしう、花やかなる事は、見るかひあれば、物語などにも、まづ、言ひ立てたるにやあらむ。されど、くはしうは、えぞ、数へ立てざりけるとや。

(宿木 五 64・14)

この場面においては、食事や祿、匂宮、薫ら列席者の様子を細かに捉えつつも、登場人物の心の内にはまでは迫ることが出来ず傍線部イのように推測するのみである点、傍線部ア・エのように、この場面の語り手の叙述内容を批判する、別の語り手による草子地が見られる点より、六条院における儀式的場面も、(3)宮中における儀式的場面と同様、その叙述を詳細に行うには、一旦その視点をその場にいる語り手に預け、場面の最後にその叙述が伝聞したものであることを示すという方法を取っていると言える。ア・エの内容を簡単に整理すると、

ア…饗応の食器など露頭の叙述について、珍しくもないことを書いてあるのは気が利かず憎らしいと批判する。

エ…祿のように賑やかで派手なことは昔物語にもまづ挙げそうなものだが、その詳しいことは数え立てられなかったらしい、と断り書きをし伝聞であることを明らかにする。

これらから、この場面が何らかの方法で聞き伝えられたものを編集したものであることは明らかである。なお、アによれば、少なくとも御馳走や餅などの記述は書かれた内容から得た情報であるらしい。

以上挙げた用例のように、六条院に関する記述は概して内容が希薄であり、院内のことを詳細に記述する場合は、登場人物の視点を借りるか、一旦は院内の語り手に視点を委ねつつも最終的には別の語り手がそれを統括するという形をとって叙述を行っている。

以上、宿木巻の語りについて考察した。この巻の語り手は、二条院方・宮中・六条院方と宇治の語りとを取り入れつつ、薫方の語り手がそれをまとめている、「つぎはぎ」ともいべき語りの方を持った巻だと考えられる。

注

- 1 引用本文は全て、日本古典文学大系『源氏物語』（岩波書店）による。カッコ内は順に、巻名・巻数・頁数・行数を示す。ただし、表記を一部改めた箇所がある。引用本文において、一重傍線部は草子地、二重傍線部は尊敬語表現、傍線部は無敬語表現、波線部は登場人物の心内描写を示す。また、これら以外でも必要に応じ破線部を引いた箇所がある。
- 2 「統篇巻頭の「その頃）」（『源氏物語の鑑賞と基礎知識 4. 橋姫』所収、一九九九年一月）より引用。
- 3 大阪樟蔭女子大学論集一二（一九七四年二月）所収
- 4 片桐洋一編『王朝の文学とその系譜』所収、和泉書院一九九一年一〇月
- 5 「中古文学論攷」一六（一九九五年一二月）所収
- 6 「源氏物語第三部の方法—中心の喪失あるいは不在の物語—」（『物語文学の方法Ⅱ』第三部十七章、有精堂

一九八九年）より引用。

- 7 なお、竹村浩子氏は前掲論文において、「宿木巻においては、中君は主人公でありながら一種の視点人物でもある」と述べておられ、その点に関して賛同する。
- 8 この「いとをしの人習はし」について、諸注の解釈は様々である。旧大系は「大層、愛でて思い捨て難い、八宮の感化」であるが、その他の注は「いとをし」を違う意味に解釈している。例えば、新大系は「お気の毒な八の宮の影響であったということだ」、玉上氏評釈は「お気の毒な八の宮の御感化とのこと」、新潮集成は「薫にはおかわいそうな（ちと荷の重い）八の宮の感化だとか、そんなことを言う人もいます。」など、「いとをし」を「気の毒である、可哀想だ」と解する注がほとんどである。ただし、ここでは「とぞ」の方を問題にしたいので深くは触れない。
- 9 その他、薫の本心を語るには宮中の語り手から薫方の語り手にバトンタッチするという方法を取っている例として、中君の出産間近である事と女二宮の裳着との記事を併記した箇所においても、薫は中君のことのみが気がかりであると薫方より言及がある用例がある（宿木 五 107・5～108・4）。ここでは特にその用例を挙げることはしない。

ふかだ やよい／お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科 比較社会文化学専攻  
日本語・日本文学コース 博士前期課程2年